

学 位 論 文 要 旨

ブラジルアマゾンの日系移民による教育と unlearn に関する研究
—パラ州トメアスーにおける農業発展を踏まえて—
Education and Unlearn of Japanese Immigrants in the Brazilian Amazon
A Case Study of Agricultural Development in Tomé-Açu, Pará.

農林共生社会科学専攻 農林共生社会科学大講座
酒井 佑輔

本稿は、ブラジルアマゾンのパラ州トメアスーへと渡った日系移民による教育の総体について、unlearn 概念を用いて明らかにしようとした。

序章では、先行研究を検討しつつ、本稿で取り上げる研究課題と対象、分析方法や調査地域について述べ、全体の見取り図を提示した。

第1章では、まず unlearn が教育実践に位置づけられ既に議論されている西欧での①人種主義と白人優越主義、②セクシャリティーと異性愛主義、③先住民や移民・難民にかかるその実践の特徴や意図する方向性を明らかにした。次に、日本でも広く議論されている比較文学研究者のガヤトリ・スピヴァクによる unlearn の要素を、①サバルタン化をもたらす社会構造と自己との共犯関係の承認、②サバルタンとの倫理的学習関係の構築に向けた想像力、であることを明らかにしたうえで、スピヴァクによる unlearn が持続可能な開発のための教育 (ESD) の社会的排除の文脈において有効であることを明らかにした。続いて、教育や学習という観点から日本独自に議論が展開している鶴見俊輔の unlearn、大江健三郎による unteach (教え返す) と unlearn (学び返す)、前平泰志による unlearn と〈ローカルな知〉、並びに学校教育に関連して議論されている unlearn の特徴の整理を試みた。以上の unlearn の理論整理を試みた結果、unlearn の特徴として、①現代社会や学校教育等を通じて自分自身が築き上げてきたものの見方や認識、あるいはそれを構成する知識の在り方を批判的に検討する、②その際には、既存の社会構造や学校教育を通じてつくりあげられたものの見方や認識において、しばしば自己よりも社会的に劣位に位置づけられる「他者」との対話・学習関係から自分自身が学び変容する、を共通する価値として有していることを明らかにした。

第2章では、ブラジルアマゾンのパラ州トメアスーにおける公立学校と日本語教育の歴史的変遷を明らかにした後、1980年代前半に日系移民によって取り組まれた日本語教育実践の内実について、生徒らが書いた作文を手掛かりに明らかにした。本章では、トメアスー入植当初は南米拓殖会社を中心となり学校の基盤整備をすすめたが、南拓が撤退して以降は移住者自らが教育基盤を整備し日本語教育や学校教育の実践を展開してきたことや、移住者の教育実践を支えるため、トメアスー総合農業協同組合や日本政府の移住支援機関（現在の国際協力機構の前進となる国際協力事業団や海外移住事業団）等も支援をおこなっていたことを明らかにした。また、生徒の作文分析を通じて、当時の日本語教育がブラジルアマゾンと日本との関係性において劣位に位置づけることで、先進国である日本の日本語習得を積極的にうながす意図があったことを明らかにした。また、それ自体がひいては優れている日本（人）対劣っているブラジルアマゾン（の人びと）といった不均衡な二分法的思考をより強固にする側面を有していたことも仮説的に明らかにした。

第3章では、まずトメアスーにおける農業発展の歴史的変遷と今日取り組まれているアグロフォレストリー（森林農業）の現状を網羅的に整理した。そのうえで、トメアスーの農業発展に関連したノンフォーマル教育について明らかにするため、日本の移住支援機関による農事講習会や青年・婦人学級、トメアスー総合農業協同組合の教育委員会や農事部が取り組んだ営農指導や後継者育成、そしてトメアスーの指導者的立場で営農をすすめる多くの日系移民に影響を与えた平賀練吉らの教育やその背景にある考え方を分析した。分析結果として、日系移民やその後継者らがトメアスーへの定住を可能にすることを意図した教育実践であったことが解明された。

第4章では、第1章で明らかにした unlearn の枠組みを再度整理した後、unlearn が農業における教育や学習において展開している可能性があることを仮説的に明示した。そして、トメアスーの農業を発展させる契機をつくった3人の日系移民による営農実践や自然観、ブラジルアマゾンの日系社会においてしばしば社会的に劣位に位置づけられるブラジル人（主に先住民やカボクロと称される人びと）に対する認識の変遷を明らかにしたうえで、彼らの unlearn を実証的に明らかにした。そして、このような日系移民による農業を通じた unlearn によって、他者を地域へと包摂しながらトメアスーで農業が発展していることを仮説的に明示した。

以上の作業を通じて、終章では本稿の整理並びに本稿の課題、そして今後の研究の展望を示した。